

と く
徳

ほ う
朋

事実を受け止める

みやぎ しずか
宮城 巖

みやぎ しずか

1931-2008

京都府出身。元真宗教学研究
研究所所長。本福寺前住職。

九州大谷短期大学名誉教授

末期癌の患者さんの話し相手をずっとされているキュープラー・ロスという方が、カウンセラーをなさりながらいろいろと調査され、『死ぬ瞬間』という^{ほんやく}翻訳で日本でも本が出版されています。一時期大変話題になった書物です。そこでキュープラー・ロスさんが、人間が自分の死を受け入れる、自分はまもなくいのち終わるという事実を本当に受け入れていくまでには、五つの段階があることをおっしゃっています。

その第一は、ショックと^{ひにん}そして否認です。その事実^{ひにん}にショックを受ける。それからそんなはずはない。~中略~しかし^{ひにん}いくら否認してもまさしく事実だと知らされてしまうのです。

第二の段階は激しい怒りです。何でこの俺がこういう目に遭わなきゃならないのかということです。~中略~

第三の段階は、取引です。もう認めざるを得ない。どれだけ腹を立てても怒り狂っていても、事実はびくとも動かない事を思い知らされると、今度は取引をするのです。いい患者になるから息子の結婚式までは生かしておいてほしいというような取引を必ずするようになる。

そしてさらに第四の段階は、^{よくうつ}抑鬱。やはり事実を受け止めざるをえない。~中略~そういういろんなことに対して心が塞がり、非常に重たい気持ちになる段階です。

そしてそれらをくぐって最後に受容するのです。そういう事実を初めて自分の事実として受

け入れていくという、このような段階を挙げておられます。

これはなにも病気だけではありません。~中略~ そういう文章を見ますと、いかに私たちが事実というものから目をそらし、その事実と真向いにならずに、いつも気晴らしや何かそういう方に逃げてしまっていて、事実、事実とやかましく言うのですが、なかなか事実に立てないで自分の思いの中にこもって生きている事が思われます。私たちはいろんなことは体験したんだけど、受け入れられるものだけ受け入れて、自分の思いの中に閉じこもって過ごしてきている訳ですが、結局その体験が確かな世界というものを開くことなしに、ただ過ぎていくというか、そういう形で月日を送ってしまっています。その根っこにあるものは、やはり自分の思い、自分の自己愛、自我愛です。その自我愛、エゴに立っている限り、どれだけの体験をしようと結局は空しく過ぎていくのです。事実に事実として出会うことなしに、どこまでも自分の思いでしか事実を捉えず、事実を受け止めずにいる限り、結局は一步も自分を出る事が無いわけですから、いろんな体験を重ねたはずだけでも少しも自分は変わらないのです。

ただ自分の思いの中にいよいよ強く閉じこもっていく。そして自分の力でしたと思う体験ばかり握りしめて、心を開こうとしないということになってきてしまっているのです。そういう自我に立つ限り、よほどの体験も決していのちを豊かにはしないし、その存在を開きもしない。何かそういうことが思われるわけです。

(『人と生まれて』)

私たちは自我というフィルターを通してしか事実を捉えられません。簡単な例えで言えば雨が降っているという事実しかないのに、総じて「悪い天気」となってしまいます。ありのままに物事を見る事が出来ない私。そんな自分の思いの狭い世界から、「広い世界に気付け」という呼びかけが南無阿弥陀仏です。(哲弘 拝)



この「徳朋」^{とくほう}は仏教を拠り所として生活した方々の言葉に直に触れ、仏教を頭で一生懸命に理解するのではなく、この身で感じる事を願いとして副住職が毎月作成しています。

